

2014・夏休みすいせん図書

— 本の森へ —

中学生



西東京市図書館

★「なにか、わたしにできることは？」★

ホセ・カンパナリ 文 ヘスス・シスネロス 絵 寺田真理子 訳/西村書店

毎日、おじさんは新聞を読む。そこには、全身がふるえあがるような記事も、たくさんある。おじさんは不安でたまらない。そして、不安をかかえたまま一日を過ごす。

あるとき、おじさんが少し寝坊した朝、口をひらくと、こんな言葉がとびだした。

「なにか、わたしにできることは？」すると…。



□「千の種のわたしへ不思議な訪問者」□

さとうまきこ 作/偕成社

ふとうこう 不登校になった中学一年の千種。ある日千種は奇妙な夢を見る。彼女の元にクスノキの精霊が現れ「今日より5回、あなたのもとへだれかをつかわしましょう。そのものたちの話をよくききなさい。きっとなにかが変わりますよ。」と、言い残して消えた。「なんだったの、いまの。」ところが夢のとおり「不思議なものたち」がやってきて、千種に身の上話を聞かせるのだった。



♠ 「ラブ・ウール100%」 ♠

井上林子 作 のだよしこ 絵/フレーベル館

お父さんの仕事の都合で転校し、新しい中学校でなかなか親友ができないアミコ。図書室に行った時に借りた編み物の本に載っていた「世界にふたつだけ、大親友とのおそろいランランマフラー」を自分と前の学校で大親友だったきゅうちゃんに編もうと思ったが、うまくいかない。そこでアミコはその本のカバーの中に書いてあった編み物教室に行ってみることにした。



● 「うそつきの天才」 ●

ウルフ・スタルク 著 菱木晃子 訳 はたこうしろう 絵/小峰書店

うそをつくのがうまい十三歳のウルフ。落第点ばかりでも、パパとママはクラスで一番の優等生と信じている。ウルフがうそをつきまくっているからだ。ところがある日、それが先生にバレてしまった。両親に本当のことを話すよう言われたウルフは、二度と家には帰らないと決めた。歩き続けるウルフが向かうのは…。



◎ 「天狗ノオト」 ◎

田中彩子 作/理論社

山間の村に引っ越してきた保。死んだ祖父の建てた家に家族と住んでいるが、祖父との思い出はほとんどない。ある日、偶然見つけた祖父の日記に記された謎の一文、

—— 昭和××年八月三十一日 天狗ニアフ。

じいちゃんは一切、なにを見たというのだろう。



◆ 「はるかなるアフガニスタン」 ◆

アンドリュー・クレメンツ 著 田中奈津子 訳/講談社

アメリカに住む六年生の女の子アビーは、勉強をサボっていたため、落第寸前状態。中学生になるために与えられた特別課題は、外国の子どもと文通し、発表するというもの。ところが、アビーが手紙を送ったアフガニスタンの村では大騒ぎ。優秀で英語ができる男の子、サディードが手紙を書くべきだが、男の子と女の子が文通するのは、村の伝統では禁止されていて…。



☆「ダーウィンと出会った夏」☆

ジャクリーン・ケリー 作 斎藤倫子 訳／ほるぷ出版

1899年、テキサスの田舎町では暑い夏が続き、家の中でも外でも昆虫の活動が活発になっていた。11歳のキャルパーニアは、なぜホタルを恵みと思い、台所に入ってくるアリを災いと思うのだろうかという疑問に思っていた。同じ昆虫なのに…。それ以降、変わり者のおじいちゃんの「共同研究者」となり、実験や観察を重ねて、しだいに科学のおもしろさにひかれていく。



■「被爆医師のヒロシマ「21世紀を生きる君たちに」」■

肥田舜太郎 著／新日本出版社

著者の肥田舜太郎氏は、広島陸軍病院で軍医をしていた二十八歳の時に、原爆にあいました。その後すぐに被爆者の治療をし、放射線による原爆病で亡くなっていく患者や『ぶらぶら病』とよばれる被爆者たちの独特の症状について診てきました。

そんな著者が実際に出会い、体験した、被爆者たちのさまざまな人生について、医師の立場から書いています。そして、21世紀を生きる若者たちに、未来について語りかけます。



♥「お菓子でたどるフランス史」♥

池上俊一 著／岩波書店

ゴーフル、マカロン、ガトー・デ・ロワ(ガレット・デ・ロワ)にミルフィーユなどはフランス菓子として有名です。ジャンヌ・ダルクやマリー・アントワネットが食べていたお菓子はどんなもの？ 国王ルイ十四世やナポレオンなどが好んだお菓子とは？

「お菓子」からみた、フランスの歴史がわかります。

